

◆六月二十一日の午後四時頃から六時頃の間、部分日食の天体ショーがあると報道された。見落とすと三年後の四月になる。この日を逃すと次は見られないと思って、金環食の時に用意した観察用のメガネを出して待っていた。当日になって外に出たら、厚い雲に覆われて、視界には日の影も形もなく残念だった。最近になってもっと残念なことは、東京でのオリンピックが延期になってテレビで見られなかったことである。歳月の流れとともに、残された時間が少なくなってきたので、あれもこれとも思いながら欲張りになったようだ。

市川茂子

◆ベランダは共有部分（避難路になります）なので、花なども置けません、子どもが小学校の頃は、持ち帰った鉢を置いていました。水やりをしますが、そのうち先祖帰りして、野菜のようになっていました。何かの折、いただいたりした花を室置きしましたが、今は、散歩途中に庭や畑の花をみます。畑といっても菜園ですね。畑で花を楽しんでいる人も多い。町内を庭のようにしているので、庭や畑に出ている人とも話をします。そんなことが一日の何か大事なことになると思います。

小野澤繁雄

◆最上川が五十数年ぶりに氾濫した。私が住んでいる左沢あてしざわの様子が全国ニュースで流された。河北町や大石田町、村山市も甚大な被害をこうむった。左沢の氾濫地点は自宅からわずか数百メートルの地点で同じ町内会であった。災害ボランティアの方々の動きは早かった。地元の高校生、他市町あるいは他県からもまとまっておいでいただいた。コロナに浸水被害、嘆いていてもしょうがない。まもなくお盆である。

神村ふじを

◆令和元年十一月に生まれた甥の長男の曾祖母の代理をしている。同年三月に逝った五歳上の姉の代役である。この役どころをとっても気に入っている。令和二年に入ってからコロナウイルスによる地球全体の閉塞感の中で、新しい命のすくすくと育っていく様子に救われている。ポストコロナの新しい時代に堂々と対処してゆく姿を祈るばかりである。長生きしたいものである。河村郁子

◆毎朝読んでいる『一日一文』が残り半分を切った。今日七月二十六日のページにはイギリスの作家バーナード・ショウの言葉が。「生に関する技術では、人間は、何物も発見しませんが、死に関する技術では自然を凌駕して、化学や機械の力で、悪疫、流行病、飢饉というような、あらゆる殺戮を行っています」。新型ウイルスの出現と蔓延、未曾有の豪雨などなど、人間が自然を壊してきた結果だろう。日々旺盛な生命力で伸びる草を刈りながら、自然に対してもっともっと謙虚であら

ねばと思う。

新野祐子

◆新型コロナウイルスのせいで、いつも借りている文京区の施設が閉鎖されるなどしたこともあり、第189回〜192回の清紫会は休みにした。だが最近、三密（密閉空間、密集場所、密接場面）を避けられるなら、施設を使っても良い、ということになった。そこで七月から集会を始めようかと思ったところ、ここにきて感染が拡大しはじめ、感染の第二波が始まったのではないかと、との声もある。今後どうしたものかと迷っているところである。

松井淑子

◆北海道にようやく夏がやってきた。関東の梅雨明けと同時に、札幌は夏日になった。レースフラワーが自生する砂利の駐車場で空を仰ぐ。（モンゴルにいたときも、苫小牧にいたときも、いつも、こうやって、空の青さを見つめていたな）と心でつぶやく。コロナ禍にありながらも、私の日常は幸いにして大きな変化はない。手指消毒、洗顔、鼻うがいなどいくつかの工程が増えはしたが、支援を必要とするところへ支援をに行く日々を重ねている。見つめる空は、私の心情を色濃く跳ね返してくる。モンゴルの空は、見上げるたびに切なく感じられた。苫小牧の空は、その広さに日々圧倒された。札幌の空は、私に健やかさをもたらしてくれる。心が晴れやかになったね、と、空が笑う。

山内裕子

